

琉球大学学術リポジトリ

子どもの健康支援活動に貢献する人材育成に向けた
取り組み：島嶼地域の小学校を対象にした教育実践

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2021-10-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 砂川, 力也, 古謝, 佑汰, 嵩原, 安貴, 三井, 綾乃, Sunakawa, Rikiya, Koja, Yuta, Takehara, Yasuki, Mitsui, Ayano メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/49855

子どもの健康支援活動に貢献する人材育成に向けた取り組み

—島嶼地域の小学校を対象にした教育実践—

砂川 力也¹⁾, 古謝 佑汰¹⁾, 嵩原 安貴¹⁾, 三井 綾乃¹⁾

Efforts to develop human resources that contribute to the health support of children
—Educational practice for elementary schools in island regions—

Rikiya SUNAKAWA¹⁾, Yuta KOJA¹⁾, Yasuki TAKEHARA¹⁾, Ayano MITSUI¹⁾

要 約

本報告は、令和3年3月4日に地域協働萌芽プロジェクトの一環で、宮古島市立北小学校の児童44名（3年生：21名，6年生：23名）を対象に体育授業における健康支援活動として、「遊びの要素を取り入れた体づくり運動」と「バランス制御の運動学習」を実践し、プログラム介入の成果を検証した。診断的・総括的調査では、プログラム介入前から体育授業に対する高い達成目標の児童が多く、少なくとも介入による目標低下の影響は認められなかった。運動有能感に関する調査では、両学年とも受容感が有意に高まり、加えて、バランス運動学習を実践した6年生では、介入後の統制感が有意に高く、運動有能感合計得点の向上に影響を及ぼしていたことが明らかとなった。また、プロジェクト後の振り返りでは、参加学生の所感より地域志向の人材育成に少なからず貢献できたと考えられる。

以上のことより、本プロジェクトで実施した内容は、体育授業における児童の達成目標を維持し、運動意欲を促進させることができ、島嶼地域の小学校と関わりの経験を持たせた参加学生にとって、少なくとも有益な学びであったと考えられる。

I. はじめに

2017年に告示された小学校学習指導要領解説（体育編）によると、体育科、保健体育科における従前の学習指導要領の成果と課題を挙げ、体育科改訂の趣旨について述べられている。とりわけ、運動やスポーツを好む児童の割合が高まり、体力の低下傾向に歯止めが掛かったこと、また、スポーツとの多様な関わり重視した内容が身に付いていることなど、一定の成果が見られる。一方、習得した知識及び技能を活用して課題解決することや、学習した内容の伝達方法等に課題があること、運動実践の二極化傾向が見られることなど、健康課題を発見し、主体的に課題解決に取り組む学習が不十分であり、社会の変化に伴う新たな健康課題に対する教育が必要であるとの指摘がなされている。それらを踏まえ、体育科、保健体育科

では、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を通して、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を育成することを目標に、これら三つの資質・能力の関係性を重視した学習過程の工夫と学校教育を通じて系統性のある指導の必要性が求められている。この基本的な考えのもとに運動領域においては、運動の楽しさや喜びを味わうための基礎的・基本的な「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の育成を重視する観点から、内容等の改善を図り、体力の向上については、心身ともに成長の著しい時期であることを踏まえ、「体づくり運動」の学習を通して、身体を動かす楽しさや心地よさを味わい、様々な基本的な体の動きを身に付けるようにするとともに、健康や体力の状況に応じて体力を高める必要性を認識できるように

¹⁾ 琉球大学教育学部 University of the Ryukyus Faculty of Education

することが挙げられている。

とりわけ、沖縄県における子どもの学力向上について、誰もが改善を望み、そして、学力問題に対し、積極的な支援や教育活動に否定する余地はないと考える。一方で、子どもの体力は年々低下し、体力二極化の課題も挙げられる中、低体力問題に理解は示しつつも、学力問題と比較し、軽視されている。その理由として、学歴社会の本邦では、学校でも家庭でも「運動」よりも「勉強」といった知識偏重を推進してきた結果であることが考えられる。現在でも「文武両道」という言葉が使われるが、実際に勉強も運動も「脳」を使って行うことは共通しており、運動能力が優れている子どもは学力も高く、両者の関係について非常に興味深い研究成果が多く発表されている。子どもの低体力課題について、特に島嶼地域では、急速な過疎化に伴う、学校の統廃合の影響から、徒歩圏内から外れ限られた通学手段で登校せざるを得ない状況におかれている。これは、年間を通して身体活動量の低下が予測されると同時に運動に対する意欲低下、スポーツに触れあう機会の減少、さらには発育発達への影響が考えられ、生涯健康の観点からも由々しき課題であると考えられる。

このような課題に対し、琉球大学では、学生の「地域志向」をより強化・拡充するため、学生自ら地域に対して積極的に関与し、地域に貢献する人材育成を目的として地域協働萌芽プロジェクトを実施している。プロジェクト内容は、主に過疎化が進む地域の課題解決に向けての健康支援活動として、食事、睡眠、運動から生活習慣の見直しと、活発な身体活動の継続を促す取り組みを本学の学生が主体となり、教材開発および教育実践を行った。本報は、その実践報告とプロジェクト介入の成果を紹介する。

II. 実践方法

1. 対象および日程

本プロジェクトは、宮古島市教育委員会ならびに宮古島市立教育研究所と連携し、令和3年3月4日に宮古島市立北小学校で実施され、対象は同校の児童44名（3年生：21名、6年生：23名）であった。

2. プロジェクトに向けた取り組み

本プロジェクトの内容を含め宮古島市での教育課題や児童の実態を把握するために、教育委員会と連携し、以下の通り準備を進めた。

1) プロジェクトの趣旨について

令和2年12月21～25日に宮古島市立教育研究所指導主事と電話およびメール会議を行い、プロジェクトの趣旨、希望する日時、対象となる小学校の規模についての確認と相談を行った。

2) 対象校の選定およびコーディネーターとの調整

プロジェクトの趣旨に合致する小学校の選定が行われ、複数校と調整をした結果、体育科の研究指定校でもある宮古島市立北小学校に決定した。その後、同小学校教諭と電話およびメール会議を数回行い（令和3年1月14日～2月12日）、対象学年・学級の選定、プロジェクトのタイムスケジュール、必要な教材等について確認と調整を行った。この間、宮古島市内における新型コロナウイルス感染拡大にともない、2週間の臨時休校となったため、準備を一時中断し、感染状況を注視しながら、プロジェクト実施の可否について、教育委員会および学校長の判断を待った。最終的には、学校長から実施可能との連絡を受け、プロジェクトに向けた事前準備を再開させた。

3) アンケート調査の依頼について

本プロジェクトの効果を検証する目的で、対象児童に診断的・総括的調査（資料4）と運動有能感に関する調査（資料5）を依頼した。調査はプロジェクト前後の計2回実施する必要があるため、事前調査については、コーディネーターの教諭へメール添付で依頼し、事後調査は、現地にて配布をお願いした（令和3年2月17日）。診断的・総括的調査の評価尺度は「たのしむ（情意目標）」、「できる（運動目標）」、「まもる（社会的行動目標）」、「まなぶ（認識目標）」の4因子、各因子5項目、合計20項目で構成され、それぞれの項目を「はい（3点）」、「どちらでもない（2点）」、「いいえ（1点）」を得点化し分析した。運動有能感に関する調査は、「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」の3因子、各因子4項目、合計12

項目で構成され、それぞれの項目を「よくあてはまる（5点）」、「ややあてはまる（4点）」、「どちらともいえない（3点）」、「あまりあてはまらない（2点）」、「まったくあてはまらない（1点）」を得点化し分析した。事前調査の回答用紙は、プロジェクト当日まで学校で保管され、プロジェクト終了後にすべての回答用紙を回収した。アンケート調査で得られた内容は、実名を伏せた上で統計解析用に処理し、本プロジェクトの目的以外で使用しないことを文章および口頭にて説明し、本調査に回答した児童については、同意を得たものとして扱い、回答を拒否した場合でも児童を含め学校関係者に不利益が生じないことを示した。

4) 教材研究および教材開発

表1に示すように、学生が主体となってプロジェクト実施に向けた準備を進めた。教材研究では、体づくり運動に遊びの要素を取り入れ、児童が身体を動かす楽しさや心地よさを感じられる内容で構成し、プロジェクト後も継続して積極的に運動やスポーツに関わることが期待される教材を採択した。また、対象者の年代は、脳・神経系の発達が著しい発育発達期に該当するため、基本的な動作の習得や動作の多様化、動作の洗礼化が、求められることから、「頭（脳）を使う運動」や巧みな動きの基盤となる身体バランスに着目した教材開発を行った。

表1 教材研究および教材開発の過程

日程	内 容
2021/1/29	●地域協働萌芽プロジェクト構想案についての話し合い 対象地域である宮古島市が新型コロナウイルス感染蔓延期となり、中止も含め検討を重ねる。実施可能他なった場合でも児童が安心安全に活動のできる内容を模索。
2021/2/19	●バランス制御の運動学習について教材研究 発注した教材が納品され、スラックライン、バランスボード、スライドボードの体験学習を行う。スラックラインは地面からの高さや張力の強度について複数回調整をおこなった。バランスボードでは、姿勢の違いや補助の方法、円柱の形や大きさの違いによる運動の感覚を検討した。スライドボードでは、移動方向、重心高の調整、摩擦面の違いを検討した。
2021/2/22	●遊びの要素を取り入れた体づくり運動の教材研究 ラベンダー体操について、運動の種類や強度、動作支持の教示方法について研究した。個人およびペアで行う運動遊びを考案し、脳・神経の発達を促す多様な動きを取入れた内容になるように思考した。また、競争の要素を含むグループ活動の運動遊びを検討し、男女教習の学びを深める内容について研究した。
2021/2/24	●バランス学習の構想案についての話し合い 教材研究で得られた成果と課題を整理し、担当者の役割を決定。プログラム全体に関わる進行の検討を行い、実際のフィールドを想定して子どもたちの導線やグループ数、体験学習の時間などの詳細について話し合った。
2021/2/25	●オリジナル教材開発 バランスボードの既製品を参考にして、オリジナルの教材を制作した。ボードの強度、摩擦、安全性、興味関心がわく外見などを考慮した。既製品は約10,000円の費用が掛かるが、プロジェクトオリジナルボードは3,000円程度で作製が可能のため、小学校でも取り扱いやすい費用となった。
2021/2/28	●スラックライン、バランスボード体験 実際の児童に体験をしてもらい、学習過程や安全性の確認などを行った。ラインが高すぎると乗ることが困難なため、児童の身長を考慮する必要性が分かった。また、バランスボードの補助方法について児童の上達に合わせて工夫することが重要である。
2021/3/1	●最終確認 これまでの話し合いや教材研究を踏まえ、プロジェクト内容と実施方法について最終確認を行った。スラックラインのセッティング方法について現地の体育館のスペースを想定し、実際に準備から片付けまでの作業を行った。また、スラックラインのスタートとゴールに跳び箱を活用し難易度の調整ができるように考案した。その他、日程や教材確認を行った。

3. プロジェクト実践

資料1に示す通り、実施日の前日より宮古島市に到着し、北小学校への挨拶およびプログラムの事前説明、学校施設の環境確認を行った。プロジェクト当日は、早朝より宿泊ホテル内にて最終確認を行い、その後、北小学校に訪問し、コーディネーターの教諭と直前の打合せを行い、プロジェクト開始まで待機した。最初に3年生の体育授業を観察し、現職教諭の授業づくりについて学生の学びを深めた。次に「遊びの要素を取り入れた体づくり運動」の実践を学生主体となって担当ごとに実践した(資料2)。給食の時間帯を利用して「食育講座」を予定していたが、新型コロナウイルス予防の観点から、食事中の発声が困難であるとの小学校からの申し出によって中止となったが、代わって栄養や運動に関する参考図書を寄贈した。午後からは、対象が6年生に代わり、「バランス制御の運動学習」を実践した(資料3)。その後、同学級の授業観察を行い、学級担任より「子どもたちと沢山交流していただきたい」との目的で図工(卒業記念品の制作活動)の授業サポートを行った。

4. 統計処理

プロジェクト介入の成果を検証するために、対象児童に対し、介入前後に診断的・総括的調査と運動有能感に関する調査を行った。得られたデータはすべて平均値(標準偏差)で示し、介入前後の得点の差については対応のあるt検定を用いた。すべての有意水準は5%未満とし、有意傾向を10%未満とした。

III. 結果および考察

1. 診断的・総括的調査結果について

診断的評価は、授業開始前に授業の学習課題が子どもにとって適切であるかどうかを判断し、総括的評価は、授業後にその成果を把握するために行われる。本プログラムでは、実施日の直前(3~7日前)とプログラム終了後に調査を行った結果、3年生は変化がなく、6年生では総合評価がプロジェクト実践前と比べて実践後に高まる傾向を示した($p<0.1$) (表2)。ところで、授業の評価は授業改善に向けて意味のあるより多くの情報

を得る目的で行うものであり、授業改善は、学習者によりよい学習成果を期待するために行われる。つまり、学習者にどのような学習成果が習得されたかを判断する情報は、本プログラムの学習指導の効果や成否を明確にする上で重要となる。この学習指導は目標に依拠するため、指導による学習成果も目標に対応することを踏まえると、授業改善を目的としたフィードバック情報を得るための授業評価尺度と目標の互換性が求められる。本プロジェクトで実施した診断的・総括的調査では、このような目標と評価の対応関係を踏まえ、運動(技能)目標、認識目標、社会的行動目標、情意目標の4つの目標に一致する評価尺度を用いている。本プロジェクトの対象者は、両学年ともに実施前からすでに高い総合評価であり、診断基準のほとんどが「+」であったことが分かる。特に3年生では「たのしむ」ことや「まもる」ことの得点が高く、体育授業に対する情意目標や社会的行動目標がすでに習得されていた可能性が高い。6年生では、実施前から高い認識目標であったが、プロジェクト後に有意に高い値を示した。とりわけ、6年生が行ったプログラムは、バランス制御を行うために自身の身体と向き合い、重心の位置や巧みな動きを身につけるため運動の「コツ」を知る必要がある。実際に、プログラム内では様々なバランス運動に挑戦してもらい、失敗を繰り返す中で「どうやったらバランスを崩さないか」、「難しいけどもっとやりたい」、「先生に教えてもらって少しできるようになった」など、積極的に「まなぶ」児童の姿が見て取れた。よって、本プロジェクトに参加した児童全体がすでに高い達成目標にあり、プロジェクト介入によるマイナスの成果は認められず、バランス制御の運動学習は子どもたちの学ぶ姿勢をより拡充できる可能性が示唆された。

2. 運動有能感に関する調査結果について

運動を継続的に行うためには、内発的動機付けが重要であり、体育授業で「運動の楽しさ体験」が重要視されていることは、この内発的動機付けの観点から支持されるものである。つまり、運動に対する関心、意欲、態度を高める目標は、児童を運動に内発的に動機づける過程を経て達成でき

表 2 診断的・総括的調査結果

項目名	3 年生 (n=21)				6 年生 (n=23)			
	実践前		実践後		実践前		実践後	
	Mean (SD)	診断基準	Mean (SD)	診断基準	Mean (SD)	診断基準	Mean (SD)	診断基準
Q 2 心理的充足	2.86 (0.36)		2.86 (0.36)		2.71 (0.46)		2.86 (0.36)	
Q 7 楽しく勉強	2.90 (0.30)		2.90 (0.44)		2.67 (0.48)		2.81 (0.40)	
Q 11 明るい雰囲気	2.76 (0.54)		2.71 (0.64)		2.76 (0.44)		2.86 (0.36)	
Q 13 丈夫な体	2.86 (0.48)		2.95 (0.22)		2.86 (0.36)		2.95 (0.22)	
Q 17 精一杯の運動	2.90 (0.30)		2.86 (0.48)		2.76 (0.44)		2.86 (0.36)	
たのしむ (情意目標)	14.29 (1.62)	+	14.29 (1.76)	+	13.76 (1.55)	+	14.33 (1.20)	+
Q 6 授業前の気持ち	2.76 (0.54)		2.71 (0.64)		2.19 (0.60)		2.19 (0.51)	
Q 9 運動の有能感	2.24 (0.83)		2.24 (0.89)		2.00 (0.63)		2.05 (0.59)	
Q 10 自発的運動	2.71 (0.46)		2.71 (0.64)		2.43 (0.51)		2.48 (0.51)	
Q 15 いろんな運動の上達	2.81 (0.40)		2.76 (0.62)		2.71 (0.46)		2.76 (0.44)	
Q 19 できる自信	2.62 (0.50)		2.71 (0.64)		2.43 (0.60)		2.43 (0.68)	
できる (運動目標)	13.14 (2.15)	+	13.14 (2.95)	+	11.76 (1.84)	0	11.90 (1.84)	0
Q 3 工夫して勉強	2.81 (0.51)		2.81 (0.51)		2.57 (0.60)		2.57 (0.60)	
Q 5 めあてを持つ	2.67 (0.58)		2.67 (0.66)		2.52 (0.51)		2.71 (0.46)	
Q 8 他人を参考	2.62 (0.74)		2.76 (0.44)		2.62 (0.50)		2.90 (0.30)	
Q 12 時間外練習	2.62 (0.74)		2.81 (0.51)		1.81 (0.75)		1.95 (0.92)	
Q 16 友人・先生の励まし	2.71 (0.64)		2.71 (0.72)		2.81 (0.40)		2.81 (0.40)	
まなぶ (認識目標)	13.43 (2.62)	+	13.76 (2.32)	+	12.33 (1.80)	+	*12.95 (1.56)	+
Q 1 先生の話聞く	3.00 (0.00)		2.71 (0.64)		3.00 (0.00)		2.90 (0.30)	
Q 4 自分勝手	2.81 (0.51)		2.24 (0.89)		2.90 (0.44)		2.90 (0.44)	
Q 14 勝負を認める	2.62 (0.59)		2.71 (0.64)		2.90 (0.30)		2.86 (0.36)	
Q 18 約束事を守る	3.00 (0.00)		2.76 (0.62)		2.95 (0.22)		3.00 (0.00)	
Q 20 ルールを守る	2.95 (0.22)		2.71 (0.64)		3.00 (0.00)		3.00 (0.00)	
まもる (社会的行動目標)	14.38 (0.80)	+	14.57 (0.81)	+	14.76 (0.62)	+	14.67 (0.73)	+
総合評価	55.24 (6.27)	+	55.76 (7.22)	+	52.62 (4.21)	+	†53.86 (3.64)	+

*:p<0.05, †:p<0.1

るものであると考えられている。内発的動機付けは、「有能さと自己決定」を感知したいという欲求に動機づけられ行動するものであり、運動に対する有能感を高めることが重要となる。すなわち、児童の運動有能感の変化を測定することは、授業効果の検討に有効な指標となる。本プロジェクトの介入前後に運動有能感に関する調査を行った結果、3年生では、受容感 (16.7±4.0点—17.6±3.8点) に有意な向上がみられた (p<0.05) (図1)。また、6年生では、統制感 (17.5±2.2点—18.4±1.7点)、受容感 (16.5±3.7点—18.0±1.7点)、運動有能感合計得点 (46.2±6.8点—48.8±4.9点) に有意な向上がみられた (p<0.05) (図2)。本プログラムにおいて、3年生に実施した体づくり運動は、「遊びの要素」を取入れつつ、個人、ペア、グループ活動を行っている。運動有能感の第三因子である受容感は、運動場面で教師や仲間から受け入れられているという認知に関する項目で構成

されており、実際の活動場面で、チームで協力しながら競争する姿が見られたことや、教師 (学生) が丁寧に指導することで児童同士の「教え合い」、「学び合い」の活動が促進された結果、受容感が高まったと考えられる。一方、6年生では身体的有能さの認知以外の因子にポジティブな変化がみられた。身体的有能さの認知は、自己の運動能力、運動技能に対する肯定的認知に関する項目で構成されており、これらを単元のはじめから高めることは難しく、単元を通して段階的に指導することが有効とされている。本プログラムでは、「体験」が目的であったため、1回の授業実践で、様々なバランス学習を数分しか行っていない。したがって、身体的有能さの認知が即時に向上する可能性は低いことが示唆される。他方、統制感や受容感の向上によって運動有能感合計得点が介入後に有意に向上していたことは、非常に興味深い結果となった。受容感については先述した通りである

が、第二因子である統制感は、自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできるかという認知に関する項目で構成されている。本プログラムで採用した教材は、スラックラインをはじめ、多くの非日常的なバランス制御が必要になる工夫がされている。当然、運動開始時はうまくバランスをとれる児童が少なく、ほとんどの動作に失敗がみられた。とりわけ、失敗が繰り返されることで運動に対する楽しさが減衰する可能性があるが、本プログラムでは逆に失敗するたびにチャレンジする児童が多かった。つまり、6年生に実施した運動学習は、運動有能感を即時的に向上させ、その要因に受容感や統制感の高まりが影響しているものと考えerことは妥当であろう。

3. プログラム実践後の振り返り

本プロジェクトは、島嶼地域における子どもの健康支援活動に貢献する人材育成を目的に学生が主体となって関わることで、様々な学びを得ることができたと言えよう。今回、プロジェクトに参加した3名の学生にプログラムの成果と課題を含めた、実践後の振り返りを行ってもらった。以下に彼らの所感(原文ママ)を紹介する。

1) 参加学生A

今回の地域協働萌芽プロジェクトの企画を行うにあたり小学生を対象に授業を行うということになり初めてのことで、どのような授業内容にするのかをみんなでたくさん話し合いました。大学で離島学習を行うことがあり子どもたちのイメージとして、男女で仲が良い、のびのびとした性格で先生と仲がいい、元気に授業に参加しているといったイメージを持っていましたが、離島の子どもたちのいつもの様子や性格などを知っているわけではないのでイメージだけで授業をつくって上手くいくだろうかと不安もありました。実際に、授業内容をみんなで話し合っていくと3年生に向けた体づくり運動では多くの運動の案を出し、その中から「これは、3年生には難しいかもしれない、この動きにはどのような目的をもって行うか」などいろいろな視点をもちて話し合ったり先生からのアドバイスも頂いたりしながら内容や順番を実践する日ギリギリまで話し合いました。6年生

の授業では、スラックラインなど実際に自分たちができるようになることに加えポイントもおさえなければいけなかったため何度も教材研究を行いました。

最初に、宮古島市立北小学校で授業観察をさせてもらいました。体操から授業に入るまで流れやテンポがあり、子どもたちが機敏に行動していました。また、体操の時には分かりやすい言葉で説明しながらしているのも良かったです。用具の工夫として、子どもたちが好きなものを取り入れてポケモンの絵を使うなど真似したい工夫がなされていました。発表の際には、先生が「どういう意味？」とわざと質問する場面があったり、どんな意見に対しても肯定的な反応をしていたりするのがとても印象的でした。このような良い点をどんどん取り入れていきたいなと思いました。授業観察後、3年生の授業を行い、想像以上に子どもたちが元気で活動している姿が印象的でした。時間との兼ね合いもあり考えてきた内容を全部行うことができず、どの活動を優先的にするか、人数を見てチーム分けはどのようにするかを瞬時に考えないといけなかったのですが、子どもたちに上手に伝わっていない部分があったり、説明する順番が入れ替わってしまったりしました。振り返ってみるともっといい指示の仕方や分け方、一度自分自身が落ち着くなどの工夫ができたのではないだろうかと思う場面がいくつもありました。授業が終わった後に砂川先生から、3時間目に子どもたちの様子を見て授業内容を変えろという案もあるよね、という言葉聞き臨機応変に対応する重要さも学ぶことができました。6年生の授業では、子どもたちが積極的に活動に取り組んでいる姿が印象的で失敗しても友達同士でアドバイスし合う姿も見られ、いい姿だなと感じました。離島の子どもたちだからこそクラス全員の距離が近く、自分のことのように親身に言葉かけができていたのではないかと思います。最初は、スラックライン等に数秒しか乗ることができなかった子どもたちがお互いに工夫し合いながら授業の終盤には何秒も、何歩も乗ることができていました。

今回のプロジェクトを通して私自身上手くないことばかりでしたが、子どもたちの元気の良さ、熱心に取り組む態度に助けられ活気のある授

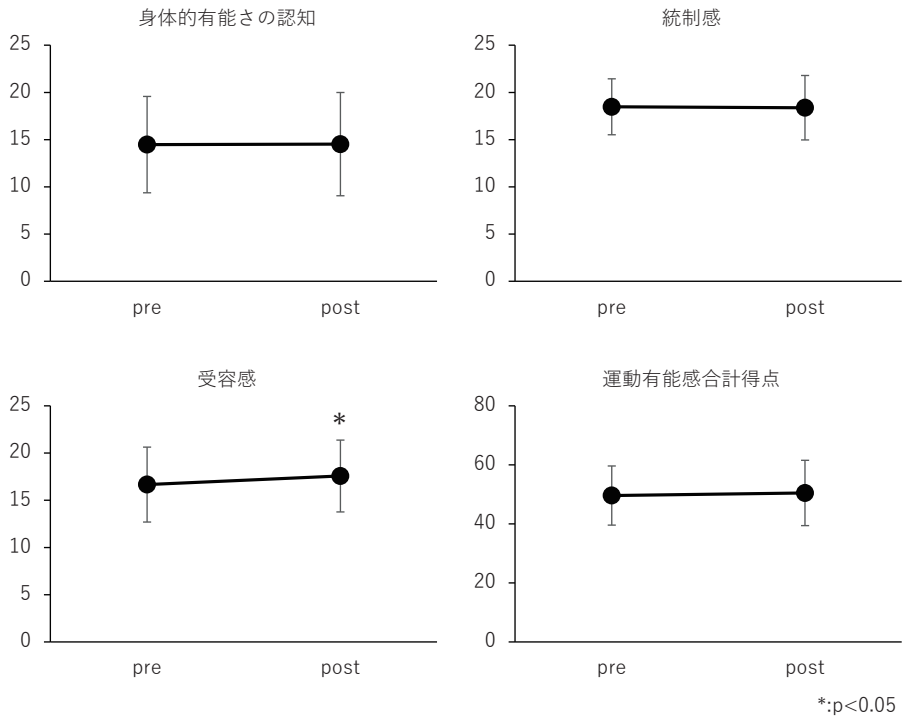


図1 小学校3年生の運動有能感

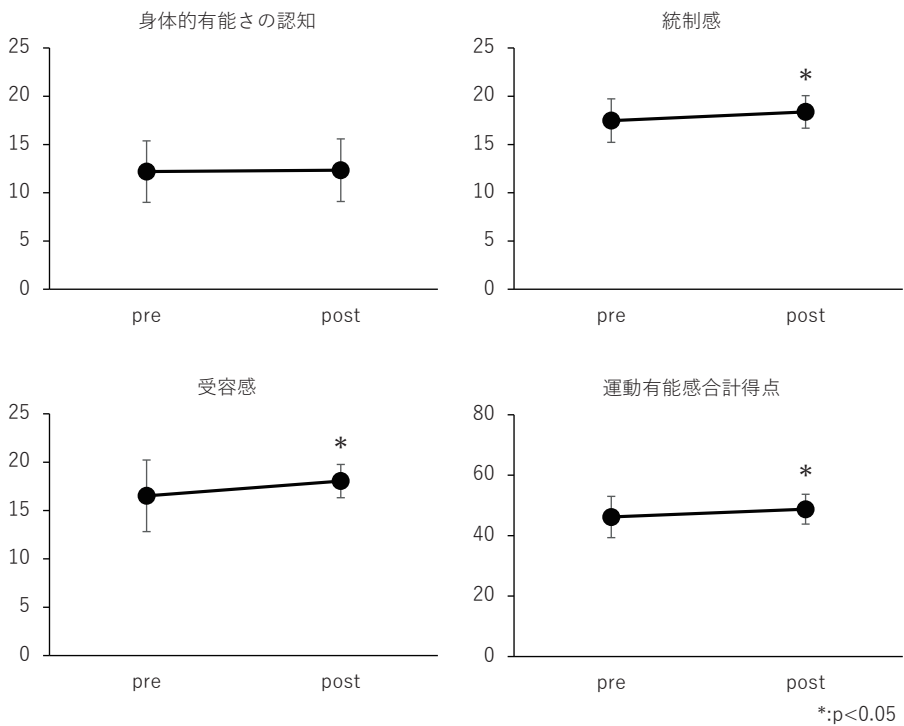


図2 小学校6年生の運動有能感

業にできたと思います。貴重な体験をさせて頂き、ありがとうございました。

2) 参加学生B

○事前準備に関して

今回、地域協働萌芽プロジェクトとして島嶼地域における子どもの健康支援活動に貢献するということを目標に授業づくりを進めていきました。また健康支援活動として、発育発達期に必要なとされる基本動作を取り入れた運動遊びの教材開発や実践を行いました。3年生は、体づくり運動の単元を行うことにしました。まず、ラベンダー体操という2分半の体を大きく使い音楽に合わせて動く体操で楽しみながら十分に体を温めて、その後個人やチームで、先生の指示から体を動かし、頭と体を使うという活動を行い、楽しみながら児童の運動量を確保したいと考えていました。その中で私は、ラベンダー体操を担当し、最初は私の見よう見まねで行わせ、その後動作を確認し、もう1度行おうと思いました。6年生は、バランス制御について授業を行うことにしました。まず、バランスの重要性について話し、3種類のバランス制御（スラックライン、バランスボード、スライドボード）を体験してもらうことにしました。その中で私は、スライドボードを担当し、左右の重心移動をスタンダードな重心移動と片足になる重心移動の2段階を行おうと思いました。

○授業実践について

当日、北小学校に行く児童が元気に挨拶をしてくれて、休み時間には校庭で元気いっぱいに遊んでいる様子を見ることが出来ました。3年生の体づくり運動の授業では、私のラベンダー体操から行いました。最初、見よう見まねで行わせた時点で思っていたより遥かに出来ていました。その後1つ1つの動作を丁寧に説明しましたが、その後の活動や児童の出来を振り返ると丁寧に説明しすぎて、時間をとってしまったなと思いました。児童の出来を見て予定を変更し進行するアドリブ力を発揮することができるとよかったのかなと思いました。6年生のバランス制御の授業では、スライドボードを約5人ずつ担当しました。最初私が見本を見せ、スタンダードの重心移動ができた児童は片足の重心移動を行うように指示を出しま

したが、児童の中には、足を振り出すのが怖くて移動できない児童もいました。そこは想定外でしたが、他の児童に手を握らせ安定を保ちながら行うように工夫することで克服することが出来ました。ただ、6年生の実態を考えるとこのような児童が出てくるとは教材研究の時点で予想できたことだと思ったので教材研究の重要性を学びました。

○今後の課題等

今回のプロジェクトで、4月から教員になる上で貴重な体験をすることが出来ました。授業を行う上で、教材研究の重要性、児童の実態を知ること、アドリブ力等の必要性を感じたので、これから他の教員を参考にするなどして身に付けていかなければならないなと思いました。

3) 参加学生C

地域協働萌芽プロジェクトとして、3月3日～3月5日の期間に宮古島市立北小学校の方で実践をさせていただきました。私は今年度の9月に公立小学校を経験しており、それ以来の授業実践でした。今回の授業実践では、午前の部に遊びの中に体づくり運動を取り入れ、午後の部にはバランス運動学習として様々なバランス学習を体験させるような内容で構成しました。本プロジェクトの実践は、実習で行ったように単元の中から抜粋して行うものではなく、単発で1コマずつ特別活動のような授業を体育領域に寄せて実践した為、これまでに経験してきた授業実践とは異なる構成だったと思います。また、実践の中のみだけでなく教材開発や授業構想においても同様でした。この実践を構想した理由や試みるにあたりどのような効果が得られるかなど、責任者である砂川准教授の指摘や助言をふまえ、私を含めた参加者3人で試行錯誤を重ね、当日ギリギリまで実践構想を練りながら本プロジェクト実践に備えていました。

実践を行った結果、児童観も本島の子ども達とも違った面が見られ、沢山プラスの経験ができたと思いました。授業実践前日に北小学校へと挨拶に伺った際、児童らがとても元気で活発な印象を受けていました。当日の実践でも児童らはとても活発に参加してくれました。その中で、多くの体づくり運動の要素を含めた遊びを準備していましたが、予定通り進めることができませんでした。

もちろん構想通りに授業が進まないことが良くないわけではありませんが、今回の実践では授業雰囲気や活発である児童らの様子に応じて、臨機応変に対応できたとは言いがたい結果だったと思います。「もう少し個人とペアの遊び要素を取り入れた動きの時間をとるべきだった」というような反省点も感じたので、流れや雰囲気に応じてこれからの手立てを判断する能力も必要だと本プロジェクトの実践で痛感しました。実践以外にも、北小学校の先生方の授業を観察させていただきました。授業を観察した学級は私たちの実践対象の学級でもあり、授業実践と授業観察を客観的に比較するきっかけになったので、非常に勉強になりました。特に午前中の3年生を対象とした「フロアボール」という体育の単元で、県の体育科コーディネーターである砂川晃輝先生の授業を観察する機会をいただけたことは非常に貴重な経験になりました。教具や環境の工夫がすごく、児童だけでもセッティングが簡単にできるようにしており、準備の段階から非常に勉強になりました。また、素直で活発な子ども達が多く、先生や発表者の話を聞くことができているように感じました。特に驚いたのは、3年生なのにも関わらず自分の役割がわかっており、ローテーションを自分達で行いながら授業を子ども達主体で進めていたことで、すごくレベルが高いなと感じました。

本プロジェクトを実践するにあたって、実践構想、教具準備、ミーティングなどを通し、多くのことを学ぶことができたと思っています。地域協働萌芽プロジェクトとして、今回は宮古島市立北小学校の方で、離島地域出身の子ども達と関わることができ、非常に良い経験をすることができました。離島での教育活動は今まで経験がなく、今回で初めてだったので、本島の子ども達と雰囲気少し違ったところもあり、とても素直で活発な児童が多く楽しく有意義な時間を過ごすことができました。4月より私は、新社会人として教職の現場に入りますが、現場での経験を重ねつつ、今回の経験を離島勤務になった際に活かせるよう頑張っていきたいと思いました。

最後にですが、本プロジェクトに尽力してくださった砂川准教授、ご協力していただいた宮古島

市立北小学校の関係者の皆様にご挨拶申し上げます。

IV. まとめ

島嶼地域における子どもの健康支援活動に貢献する人材育成に向けた取り組みについて、宮古島市内の小学校をフィールドに「遊びの要素を取り入れた体づくり運動」や「バランス制御の運動学習」を学生が主体となって実践した。プログラムに参加した児童全体がすでに高い達成目標にあり、プロジェクト介入によるマイナスの成果は認められず、バランス制御の運動学習は子どもたちの学ぶ姿勢をより拡充できる可能性が示唆された。さらに、体づくり運動の場の工夫や高学年に対するバランス運動学習は運動有能感の一部の因子を向上させることが考えられる。また、本プログラムを通じて学生に対し地域志向型のリーダーシップマインドの育成に少なからず貢献できたと考えられる。

謝辞

本プロジェクトを実施するにあたり、宮古島市立教育研究所ならびに宮古島市立北小学校の皆様にご協力によって実現することが出来ました。特に北小学校の砂川靖夫校長、下地忠夫教頭、砂川晃輝教諭、濱里拓哉教諭、佐久本拓実教諭には、多大なご配慮と御支援を頂きました。心より御礼申し上げます。最後に、プロジェクト後に心温まるお手紙を書いてくれた北小学校3年生と6年生の児童たちに感謝申し上げます。

付記

本プロジェクトは、令和2年度地域協働萌芽プロジェクトの助成によって行われたものである。

参考文献

阿江通良：幼児の動きの発達にはさらに何が必要か—日本体育協会「幼少年期にみにつけておくべき基礎的動きプロジェクト」から—、*体育の科学*59：317-323, 2009.




- 藤田勉: 体育授業における目標志向性、動機づけ、楽しさの関係. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要19: 51-60, 2009.
- 長谷川悦示, 高橋建夫, 浦井孝夫, 松本富子: 小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み. スポーツ教育学研究14 (2): 91-101, 1995.
- 橋本剛幸, 永浜明子: 児童生徒のアンケート分析からみた学校体育カリキュラムの研究—生涯スポーツにつながる授業を目指して—. 大阪教育大学紀要第V部門 62 (1): 79-93, 2013.
- 北見裕, 吉野聡: 器械運動の授業における教えあい学び合の活動が生徒の運動有能感に及ぼす影響—中学校体育における実践事例の分析を通して—. 茨城大学教育実践研究27: 77-90, 2008.
- 文部科学省: 小学校学習指導要領解説保健体育編, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf, 2017. (2021.3現在)
- 落合優, 加藤務, 村瀬浩二: 小学生の運動・スポーツに対する意識について. 横浜国立大学教育人間科学部紀要 1, 教育科学 (9): 24-35, 1998.
- 岡澤祥訓, 北真佐美, 諏訪祐一郎: 運動有能感とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究16 (2): 145-155, 1996.
- 岡澤祥訓, 真庭美保: 運動有能感を高める方法その1—現職教師に対するインタビュー結果から—. 体育科教育47 (1): 49-51, 1999.
- 小畑治, 岡澤祥訓, 石川元美, 森本寿子: 運動有能感を高めるマット運動の授業づくり—技能獲得に必要な技術認識を高める工夫を中核に—. 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 20: 137-144, 2011.
- 高橋建夫, 長谷川悦示, 刈谷三郎: 体育授業の「形成的評価法」作成の試み: 子どもの授業評価の構造に着目して. 体育学研究39 (1): 29-37, 1994.
- 若吉浩二, 高橋豪仁, 今枝和与, 岸田悟, 長谷川芳彦, 石川元美, 田辺正友: 小学生児童における運動能力・運動習慣の経時的変化—スポーツ教室開催の影響—. 奈良教育大学紀要 54 (2): 39-47, 2005.
- 吉野聡, 本塚敏彦, 岡澤義典, 林恒明, 高橋丈夫: 体育授業における教師の発案と形成的評価の関係. 日本スポーツ教育研究20 (1): 19-30, 2000.

資料1 プロジェクトスケジュール

Day1 3月3日(水)		備考
時間	内容	
10:30	那覇空港集合	服装：自由 場所：出発ロビー(3階) ※手荷物等の最終確認
12:00	那覇空港発	
12:50	宮古空港着	
15:00	ホテルチェックイン	
16:00	宮古島市立北小学校訪問 ・学校長等への挨拶	服装：プロジェクトユニフォーム
Day2 3月4日(木)		
9:50	ホテル出発	服装：プロジェクトユニフォーム
10:00	砂川長峰先生と直前打ち合わせ	
10:45	3年生の体育授業観察	
11:40	遊びを入れた体づくり運動 ・ラベンダー体操 ・体づくり運動	3年生:24名 ※別冊参照
12:40	食育講座(中止)	
13:30	スラックライン等の会場設営	
14:00	ハランス制綱の運動学習 ・スラックライン×2 ・ハランスボード×2 ・スライトボード×1	6年生:24名 ※2つのグループに分かれて行う
14:55	6年生の授業観察	
16:25	清里巴哉先生、佐久本拓実先生 学校長へのお礼の挨拶	アンケート回収 (アンケート未回収の場合、翌日に回収)
Day3 3月5日(金)		
13:40	宮古空港発	
14:30	那覇空港着	那覇空港解散

2021

地域協働萌芽プロジェクト

島嶼地域における子どもの健康支援活動に貢献する人材育成に向けた取り組み

令和3年3月3日～5日

資料2 遊びの要素を取り入れた体づくり運動

○遊びの要素を取り入れた体づくり運動

・準備物

笛, スピーカー, 音源, フラフープ

4校時 (11:40~12:25)

時間	学習内容	学習形態	生徒の指導・留意点
導入 3~4分	1) 砂川先生による説明 「体づくり運動」	一斉	・児童の体調を確認しつつ、学級の雰囲気やキーとなる児童を探す。
展開 ~13分	2) 体ほぐし運動 ラベンダー体操 (高原) ・振り付け指導 ・1回目実施 ・指導後もう一度実施	一斉	・担当者は、見本を示しつつ、次の指示を口頭で行いながら、実施する (体ほぐし)。
~25分	3) 個人, ペア遊び (古謝) ・手押しずもう ・シグナルゲーム ・後出しジャンケン ・まねっこゲーム ・調整ゲーム (目隠し)	個人 ペア	・遊びのジャンプは体操時にやったことを想起させて行う。 ・手押し相撲は様々なバリエーションで行う (バランス, 力だめし)。
~37分	4) 全体遊び (三井) ・人間カッター ・とびっこ遊び (立幅, 走幅) ・けんけんりレー (一回のみ) ・馬跳びりレー	グループ	・リレーは2回実施し、間に作戦タイムを設け、その間児童等の様子を見取る。
まとめ ~42分	5) 今日の授業のまとめ (三井) ・授業を行っての感想 6) 着替え・片付け	一斉	・時間を見ながら、調整する。

資料3 バランス制御の運動学習

○バランス制御の運動学習

・準備物

スラックライン2セット, 跳び箱, バランスボード2セット, スライドボード
5校時 (14:00~14:45)

時間	学習内容	学習形態	生徒の指導・留意点
導入 3~4分	1) 砂川先生による説明 ・バランスについて 2) 準備体操 ・体育係中心に進行	一斉	・児童の体調を確認しつつ, 学級の雰囲気やキーとなる児童を探す. ・ストレッチ効果が得られるよう, 必要であれば, 指示する.
展開 ~37分	3) 各バランス学習のブースの説明 Aスラックライン (三井・砂川) 跳び箱を使用して高さを揃え, ラインの長さで難易度を調整. Bスライドボード (古謝) 重心移動や巧みな動きを取り入れた指導. Bバランスボード (高原) どの程度乗れるかなど, 競ったり, 支柱の選択で難易度を調整.	グループ	・学級を2グループに分け, 前半と後半で交換して行う. (前半Aブース, 後半Bブース, (前半Bブース, 後半Aブース) ・スラックラインは2本あるので, 2人スタッフを配属 (基本三井の指示で進行). ・ボード組は時間とさらにブースで3グループに分け, 時間と状況からローテーションを行う.
まとめ ~42分	5) 今日の授業のまとめ (高原) ・授業を行っての感想 6) 着替え・片付け	一斉	・時間を見ながら, 調整する.

資料4 診断的・総括的調査

体育授業についての調査

令和3年 月 日

小学校 年 組 男・女 番 名前[]

この文章を読んで、自分の考えにあてはまる場合は「はい」に○をつけてください。あてはまらない場合には「いいえ」に○を、また、どちらともいえない場合には「どちらともいえない」に○をつけてください。

- | | |
|--|--------------------|
| 1 体育では、先生の話 ^{せんせい} をきちんと聞いています ^{きいて} 。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 2 体育で体を動か ^{からだをうごか} すと、とても気持ち ^{きもち} がいいです。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 3 体育をしているとき、どうしたら運動 ^{うんどう} がうまくできるかを考えながら勉強 ^{べんきょう} しています。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 4 体育では、いたずらや自分勝手 ^{じぶんがって} なことをしません。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 5 体育で運動 ^{うんどう} するとき、自分のめあて ^{めあて} を持って勉強 ^{べんきょう} します。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 6 体育が始まる前 ^{まえ} は、いつもはりきっています。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 7 体育では、みんなが、楽しく勉強 ^{べんきょう} できます。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 8 体育をしているとき、うまい子 ^こ や強いチーム ^{つよ} を見てうまくできるやり方 ^み を考えた ^{かんが} ことが
あります。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 9 私は、運動 ^{うんどう} が、上手 ^{じょうず} にできるほうだと思 ^{おも} います。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 10 体育では、自分 ^{じぶん} から進 ^{すす} んで運動 ^{うんどう} します。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 11 体育は、明るくてあたたかい感じ ^{かんじ} がします。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 12 体育で習 ^{なら} った運動 ^{うんどう} を休み時間 ^{やすみ} や放課後 ^{じゅくご} に練習 ^{れんしゅう} することがあります。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 13 体育をすると体 ^{からだ} がじょうぶになります。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 14 体育で、ゲームや競争 ^{きょうそう} で勝 ^か っても負 ^ま けても素直 ^{すなお} に認 ^め めることができます。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 15 体育では、いろいろな運動 ^{うんどう} が上手 ^{じょうず} にできるようになります。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 16 体育では、友だち ^{とも} や先生 ^{せんせい} がはげましてくれます。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 17 体育では、せいっぱい運動 ^{うんどう} することがてきます。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 18 体育では、クラスやグループの約束 ^{やくそく} ごとを守 ^{まも} ります。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 19 私は、少しむずかしい運動 ^{うんどう} でも練習 ^{れんしゅう} するとできるようになる自信 ^{じしん} があります。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |
| 20 体育で、ゲームや競争 ^{きょうそう} をするときは、ルール ^{まら} を守 ^{まも} ります。 | (はい・どちらともいえない・いいえ) |

資料5 運動有能感に関する調査

令和 3年 月 日

運動有能感に関する調査

この調査用紙には、運動についての文章があげてあります。それぞれの質問について、自分にあてはまると思う番号に○をつけてください。この調査は、あなたの成績とは関係ありません。

小学校 年 組 男・女 番 名前「 」

- 「よくあてはまる」・・・5
- 「ややあてはまる」・・・4
- 「どちらともいえない」・・・3
- 「あまりあてはまらない」・・・2
- 「まったくあてはまらない」・・・1

1	運動能力がすぐれていると思います。	5	4	3	2	1
2	たいていの運動は上手にできます。	5	4	3	2	1
3	練習をすれば、必ず技術や記録は伸びると思います。	5	4	3	2	1
4	努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います。	5	4	3	2	1
5	運動しているとき、先生が励ましたり応援してくれます。	5	4	3	2	1
6	運動をしているとき、友だちが励ましたり応援してくれます。	5	4	3	2	1
7	一緒に運動をしようと誘ってくれる友だちがいます。	5	4	3	2	1
8	運動の上手な見本として、よく選ばれます。	5	4	3	2	1
9	一緒に運動する友だちがいます。	5	4	3	2	1
10	運動について自信をもっているほうです。	5	4	3	2	1
11	少しむずかしい課題でも、努力すればできると思います。	5	4	3	2	1
12	できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思います。	5	4	3	2	1

資料6 運動指導の風景と宮古島市新聞記事



宮古新報

先生の指導に従って身体を動かす児童たち＝北小学校体育館

(第三種郵便物認可) (日)

頭使う体づくり学ば

琉大地域協働萌芽 P.Jで北小訪問 砂川准教授らが指導

2019年度地域協働萌芽科で行い、児童たちははるばる身体を動かしていたとは元気で、3年生にも関わらず、的確に動いていた。砂川准教授ら4日、北小を訪れ、先生の手伝いに従って、4月から教員として勤務する。児童安貴さんは「空馬に乗るの初めて、本番の子と一緒に行うことができたのは貴重だった。」と喜びを語った。

2019年度地域協働萌芽科で行い、児童たちははるばる身体を動かしていたとは元気で、3年生にも関わらず、的確に動いていた。砂川准教授ら4日、北小を訪れ、先生の手伝いに従って、4月から教員として勤務する。児童安貴さんは「空馬に乗るの初めて、本番の子と一緒に行うことができたのは貴重だった。」と喜びを語った。